

## バビロニアとヘレニズム (二)

——「ディアドコイ年代記」——

田 中 穂 積

はじめに

アレクサンドロス大王の没後、ディアドコイ時代にはいると、バビロニアは、とりわけ、アンティゴノス、エウメネス、セレウコスたちの抗争の場となり、最後にセレウコスの支配下におかれた。ここに取り上げる、いわゆる「ディアドコイ年代記」とは、主にバビロニアにおける、それらの争いを年代順に記録したものである。それは二枚のアッカド語楔形文字タブレットに書かれており、ブリティシュ・ミュージアムに所蔵されていて、BM 34660、BM 36313のタブレット番号が付されている。これらタブレットを最初に解読、発表したのは、S・スミスであり、近年では、A・K・グレイソンの校訂がみられる<sup>(1)</sup>。

この「ディアドコイ年代記」は、かなり破損していて、断片的な内容となっている。年代に関しては、二人の王、それにアンティゴノスの年代がみられる。二人の王とは、アレクサンドロス大王(三世)の異母兄弟アッリダイオスで、改名して王となったピリッポス(三世)と、大王の没後に生まれた、子のアレクサンドロス(四世)である。あとで取り上げるように、この年代記にみられる複雑な年代の用い方は、当時の混乱した政治、社会を反映した表現と

いえよう。

ところで、この「ディアドコイ年代記」が、表題にあげたバビロニアのヘレニズム問題を論じる直接の手掛かりではないが、ヘレニズム時代初期のバビロニア事情がうかがう主要な史料であることから、ここに取り上げることにした。もちろん、アレクサンドロス大王以後のバビロニア側の史料としては、この年代記の他に、王位年代の記録、天体観測記録、経済文書など、アッカド語の楔形文字史料が知られている。これらについては、本論で関連する際に言及することにする。

## 一 BM 34660

「ディアドコイ年代記」、最初のタブレット BM 34660 の冒頭は破損していて、年代は不明である。しかし、続く部分からみて、冒頭部はピリッポスの第四年（前三二〇／一九年）の記録とみて差支えなからう。3行目において、「アイヤルの月、王はエジプトのサトラップと戦った……」とあり、ここで、かなり具体的なことが知られる。つまり、前三二〇年、五一六月（アイヤルの月）、王を擁したペルディッカスがプトレマイオスに対して、エジプトに遠征したのである。

このことは、ギリシア・ローマの古典文献から知られている。そこで、この時期にいたるディアドコイの動向を、それらの文献から考察しておきたい。

アレクサンドロス大王が没したとき、朋友騎兵隊（ヘタイロイ）の指揮者として、大王に次ぐマケドニア軍司令官の地位にあったのは、ペルディッカスで、かれは大王の後継者を選ぶ優位な立場にあった。これに対して、歩兵密集隊（パランクス）を掌握したメレアグロスがピリッポスを抱き込み、ペルディッカスを陥れようとした。危険を察し

たペルディッカスは、バビロンの町を出た<sup>(2)</sup>。しかし、ペルディッカスが巻き返しをはかったので、事態は、いつそう混乱した。この時のバビロンの状況を、『アレクサンドロス大王史』を書いた一二世紀初頭のクルティウス・ルフスは次のように描写している。

「(バビロン内の諸民族の使節、軍の指揮者たちは、) 敵対的で、屈伏しない諸族、すなわち多大の災害を被ったことから、折りあれば、いつでも懲罰を加えてやろうと待ち構えているものたちの真中にさらされていた。それで、かれらは、ペルディッカスの下にあつて、バビロン周辺の平原に陣取っていた騎兵隊が、この都市に供給される穀物の搬入を阻止したときのことをおもしろい、恟々としていた。やがて、まず食料が不足し、ついで飢餓がはじまつた。それで、都市のなかにいたものは、ペルディッカスと和解すべきとか、いや戦うべきだとか、といいだした。たまたま、おこつたのは、平原のものたちは、家々や村々が惨害に見舞われるのを恐れて、都市に逃げ込もうとし、一方、都市内のもんたちは、糧食が尽きたので、都市の外へ出ようとしたことであつた。お互いに、他のもの居住地が自分たちのそれより、安全だと考えたからであつた。」(Curt. X, 8, 10-13)

クルティウスの用いた史料、それに、かれの叙述については、問題のあるところである。その修辭のゆえに、ときには稗史と見られがちである。しかし、そこには、かれの史観とも呼べる記述態度がうかがえ、この場合、マケドニア軍内における軋轢、オリエント原住民の抱く反抗、また、バビロンの町やその周辺のものたちを不安に陥れた事情などは、当然の見方と受け入れてよからう<sup>(3)</sup>。

このあと、ペルディッカスは、メレアグロスの歩兵密集隊における不人氣に乗じて、歩兵密集隊を掌握し、そして王を擁して、メレアグロスを死にいたらしめた。ペルディッカスは、王の名において、つまりディオドロスによれ

ば、最高司令官として、諸將のサトラップ配属をきめた。すなわち、ラゴスの子プトレマイオスをエジプトに置いたのははじめ、各地域と分掌した諸將の名があげられているが、バビロニアにはアルコーンを、メソポタミアにはアルケシラオスを配し、またセレウコスには、ペルティッカスが任じていた朋友騎兵隊の指揮官の地位を与えた。そして、アツリダイオス（ピリッポスとは別人）には、アレクサンドロス大王の遺骸をアイガイへ移すため、その搬送と靈柩車の準備を指示した<sup>(4)</sup>。

そこで、タブレットの意味内容が把握できる行から、取り上げてみる。1—6行の年代は、先に断っておいたように、ピリッポスの第四年とみられ、前三二〇—一九年である<sup>(5)</sup>。以下、文頭の数字はタブレットの行数で、A・K・グレイスンにしたがった。

#### タブレット表面

##### 欠損

- 3 「……」……のサトラップ職に
- 4 アイヤルの月、王はエジプトのサトラップと戦った「……」
- 5 王の軍隊は、王の軍隊を殺害した。アラクサムヌの月、十(x)日に「……」
- 6 アッカドのサトラップはバビロンに入った。その同じ年、「エサギルの」瓦礫は(……)「取り除かれた」

4行目では、人名が知られないが、おそらく、ピリッポスを擁したペルティッカスがエジプトのプトレマイオスに對して、遠征したことを指すとみてよい。前三二〇年、ほゞ十一月である。この理由を古典史料から、うかがってみると、次のようである。

ペルディッカス主導の政体は弱く、かれに対する反抗が表面化した。その一つは、アレクサンドロス大王が没して、二年も経過してから、その遺骸がアイガイに送られることになったが、プトレマイオスが他の者と共謀して、大王の遺骸をエジプトに運ばせたことであった。こうしたプトレマイオスの行為、また、かれが、先に大王によってエジプトの財政を委ねられ、ペルディッカスを支持していたクレオメネースを殺害していたこと、などもあって、ペルディッカスは自身の威信のためにも、ピリッポスとともにエジプト遠征をおこなった<sup>(6)</sup>。

ペルディッカスの軍は、ナイル流域のカメーロン・テイコス(駱駝の砦)にむかつて進んだが、嵐のために奪取できなかった。そこで、メンピス近くの上流に進んだペルディッカスは、渡河作戦に失敗して、二千人を失った。プトレマイオスは、その死者たちを荼毘に付したのに対して、ペルディッカスの軍中には悲哀感が満ち、ピトンはじめ諸將による反乱がおこり、ペルディッカスは殺害された(Diod. XVIII, 33-36)。

したがって、4—5行は、ペルディッカスのエジプト遠征、そして、かれが殺害されたことと、その後のトリパラデイスの会談、セレウコスのバビロニアのサトラップ着任を指すものとおもわれる。

トリパラデイスの会談は、シリア中央部のトリパラデイスでおこなわれたマケドニア軍会議であった。ディオドロスによれば、サトラップの配分が改められておこなわれ、そのうち、メソポタミアとアルベリテイスはアンピマコスに、バビロニアはセレウコスに委ねられ、そして、アンティゴノスは、大プリュギアとリュキアを支配し、また、かれは王の軍隊の將軍の地位についた(Diod. XVIII, 39)。セレウコスがバビロニアのサトラップになったのを、アラクサムヌの月の十何日にとすれば、それは、前三二〇年十一月のこととなり、その前におこなわれたトリパラデイスの会談は、夏とみることができる。バビロニアのサトラップとなったセレウコスは、バビロンのエサギル(神殿)の清掃をおこなったのである<sup>(7)</sup>。

7 ピリッポスの第五年。月は不明、王「……」アンティゴ「ノス……アンティパトロス」  
8 マケドニアに渡った。そして、帰って来なかった「……」

9 それが破壊されたあと、火がそれを焼き尽くした。セレウコス、「……」のサトラップ

ピリッポスの第五年は、前三一九／一八年である。7—9行で、アンティゴノス、セレウコスの他にアンティパトロスの名が考えられる。そして、撰政となったアンティパトロスのマケドニアへの帰還が推定される。炎上云々についてはマケドニアにおける出来事かも知れないが、不明である。

10 ピ（リッポス）の第六年。ウルルの月、アッカドのサトラップ、……植物、「……」銀からの銀

11 そして、かれが「……」による銀で形成したアッカドの全軍

12 「……」ドウル(Dur-)への羊飼い、アッカドの良き扉

13 同じ年、マケドニアにおけるピリッポス「……」

10—13行のピリッポス第六年(前三二八／七年)についても、よく分からない。アッカドのサトラップ、あるいはアッカドの全軍とは、セレウコス、また、かれの軍隊であろう。12行目までは、セレウコスの行動を取り上げているのであろう。

14 ピリッポスの第七年。タシユリトウの月、ドウ(Du-)に(駐屯していた)王の軍隊「……」

15 バビロンの王宮の……は、かれらから取り、そして「……」

- 16 アッカドの支配者は葦の家を葺き「……」  
 17 王が「……」の間の防衛地点を強化するために(配置した)カニイ  
 18 「……」アンティゴノス、サトラップ「……」

ピリッポスの第七年(前三一七／六年)にあたる14—17行は、エウメネースとセレウコスの衝突であろうか。デオドロロスによれば、アンティゴノスの勢力を恐れたエウメネースは、シリアから、メソポタミアに入り、王の軍隊の指揮者たる意識のもとに、セレウコスに助力を求めるが、バビロン近くで対立、または戦って危険な目にあい、そのあとエウメネースは、スーシアナーをめざした。カニイとは、エウメネース下のマケドニア人銀盾兵であろうか。この出来事について、デオドロロスは、二度述べてゐる(Diod. XVIII, 73; XIX, 12-13)。しかし、タブレットによれば、タシユリトウの月(十月)頃、エウメネースがバビロンを占領し、セレウコスが追い出されたような表現が取られている。そして、このあと、18行目ではアンティゴノスがセレウコスに迫っているようである。

- 19 「ピ」リッポスの「第八年」。ドウウズの月、アンティ「ゴノス……」  
 20 「……」王宮内におけるところの「……」  
 21 「……」人々「……」  
 欠損

ピリッポスの第八年(前三一六／五年)、この年にはピリッポスは生存していない。かれの没時は、前三一七年、晩夏か秋である<sup>(8)</sup>。

19行目の前三一六年、六一七月（ドウウズの月）、アンティゴノスが何をなしたのか、不明である。しかし、この年、セレウコスにはアンティゴノスにバビロンを追われている。ディオドーロスによれば、エウメネスを倒したアンティゴノスは、バビロニアのサトラップであるセレウコスに尊大に迫ったことを伝えている。アンティゴノスは、セレウコスに対して、収税目録を提出するよう求めたが、セレウコスは、それはこの地域の行政調査用のもので、アレクサンドロスの生存中、マケドニア人がかれに承認したものであるから、といって断ったという。しかし、圧倒的なアンティゴノスに対して、セレウコスは、バビロニアを捨て、プトレマイオスの友情を頼って、エジプトに逃れた（Diod. XIX, 55, 1-5）。このディオドーロスの記述に関係するものとおもわれる。

#### タブレット裏面

#### 欠損

- 2 「東」と西の方に「……」
- 3 「……」かく言った。第七年、アンティ「ゴノス……」
- 4 「……」セレウコス、軍隊の指揮者、神官たち「……」
- 5 セレウコス、「……」エメスラムの管理者「……」
- 6 かれは、宮殿を獲得しなかった。同じ月……銀「……」
- 7 アブの月、セレウコス、宮殿を獲得するために「……」
- 8 逆上していた。かれは、ユーフラテス川を塞ぎ止めなかった「……」
- 9 「……」の内に、セレウコス「……」バビロンから「……」に
- 10 それはティグリス河畔に「……」出ていった「……」



- 11 アラクサムヌの月に、親善と「……」  
12 グティの軍隊と「……」軍隊  
13 同じ年、エサ「ギル」の瓦礫は「(……) 除かれた」

3行目は、王ではなく、権勢者アンティゴノスの第七年で、前三一一／一〇年にあたる。アンティゴノスの第一年は、ピリッポスの死の年、前三二七／一六年から算定されているとみてよい<sup>99)</sup>。

そこで、ファン・デア・スベクによれば、この3—4行は、ストラテゴスであるアンティゴノスの第七年、すなわち、ストラテゴスであるセレウコスの第一年の意と解釈すべきである、と提案している<sup>100)</sup>。5行目のエメスラムは、バビロンの北方にあるクタのネルガル神殿であろう。セレウコスは、バビロン獲得のために、エメスラムの援助を求めたのであろうか。5—6行は、セレウコスによるバビロン獲得の困難さを表現しているとおもわれる<sup>101)</sup>。

7—11行が、ディオドロスの記述の文脈で読み取れるとすれば、その一つの見方は、7行目が、セレウコスによるバビロンの城塞獲得である(Diod. XIX, 91, 4)。そして、9—10行は、セレウコスは、メーディアとペルシスで兵力を集めたニカノルを討つために、バビロンを離れ、ティグリス川を渡った(Diod. XIX, 92, 1-3)。11—12行は、ニカノルの軍のペルシア人がセレウコスの軍へ脱走(Diod. XIX, 92, 4)。そしてセレウコスは、前三二一年、アラクサムヌの月(十一月)、ニカノルを降し、このあとセレウコスは、東方、スーシアナー、メーディアを攻略した(Diod. XIX, 92, 5)<sup>102)</sup>。もし、このような見方が可能ならば、ガザの戦い(前三二二年)のあと、セレウコスによるバビロニア、スーシアナー、メーディアの掌握は長期にわたっており、ディオドロスの叙述のように、前三二二年の出来事とみなすことはできない。12—13行は、セレウコスが、グティ族と提携し、次いでバビロンに入り、エサギルを清掃したと読み取れるであろうか。

ところで、前三一一年のディアドコイ世界における重要な出来事は、アンティゴノス、カッサンドロス、リュシマコス、プトレマイオスによる講和であった<sup>14)</sup>。そこにセレウコスの名が表れていないのは、タブレットにみられるように、アンティゴノスとセレウコスの争いが長期化していたためであろう。

14 第七年。アレクサンドロス王、(すなわち) 同名の息子、そして「……」

15 アンティゴノスは、セ「レウコスの」軍隊と戦い「……」

16 アブの月から、テベトウの月まで「……」

17 「かれらは」、互いに「戦った……」

欠損

アレクサンドロス王とは、アレクサンドロス大王の没後に生まれた、子のアレクサンドロス(四世)である。その第七年は、前三一〇/九年にあたる。なお、天体観測タブレット BM 40591 には、「[アレクサンド]ロス王、同名の息子の「第七年」、セレウコスが「將軍」であった。」とある(裏面11行目と上部側面)。また、表面9行目に、「(第五月)、二十三日(省略)。パニックが地上におこった。11-12行に、「かれは不法にも、大麦となつめやしを取った。……」、14行目に、「……アンティゴノスの軍隊は、……で戦った」とある<sup>15)</sup>。これらと、「ディアドコイ年代記」の両タブレットからみると、前三〇九年—二月まで、アンティゴノスとセレウコスの戦いは続いている(アブの月は、前三一〇年、八月九月。テベトウの月は、前三〇九年、十一月)。この戦いは、ディオドローロスの述べるように、アンティゴノスではなく、その息子デーメトリオスによるバビロン奪回であろう(Diod. XIX, 100, 3-4)。

## 一 BM 36313

17行目のあと、3行程度の欠損がある。そのあと、次にあげる21行目以下は、タブレット BM 36313で、裏面のみである。その最初の21行目から、33行目までは、年代順からみて、アレクサンドロスの第八年、つまり前三〇九〇八年の時期の出来事とみてよからう。最初の欠損部分に、天体観測記録にみられるような、「アレクサンドロス王、同名の息子の第八年、セレウコスが將軍であった。」という見出しがあったとおもわれる<sup>50</sup>。つまり、先にあげた、アレクサンドロスの第七年における、天体観測の記録と同様の表現である。

## タブレット裏面

- 21 「……アンテ」イゴノスは反撃した「……」  
 22 「……」エサギルと……間に「……」  
 23 「……アン」テイゴノスは多勢の軍隊をもって「……」  
 24 「……」……入った。その月の八日から「……」  
 25 「……」かれは、カル家 (Bitharee) を占領しなかった。シャバトゥの月、X日「……」  
 26 地上には、悲涙と哀痛が。南風「……」  
 27 バビロンから出ていった。かれは、都市と田舎を略奪した。所有物「……」  
 28 第二日、かれはクタに行った。そして「……」の略奪  
 29 人々は避難した。「かれは」ネルガルの財庫に火を「つけた……」

- 30 x x i s k i l a m u、サトラップ職に [……]
- 31 バビロン「の内」で、かれは、かれに委ねた。同じ年、大麦と、なつめやし一スツ [……]
- 32 [……] ……同じ年、地上の多くの神殿 [……]
- 33 バビロン「から」かれらは出ていった。エ「サギル」の瓦礫は……「取り除かれた」
- 21—33行は、ディオドローロスとプルートアルコスPloutarchosの記述から読み取れるとすれば、以下の見方になるであろうか。21行目から、25行目はデーメートリオスのバビロン攻撃である (Diod. XIX, 100, 6-7; Plout. Dem. 7, 2-3)。シヤバトゥの月、つまり前三〇九年、一—二月まで、バビロンで攻撃を繰り返し、このあと、クタに行き、略奪した。25行目、カル家 (bit pare) については不明、要塞であろうか。30行目の最初、アルケラオスと読めるならば、デーメートリオスは、かれをバビロンに残したとみられる。33行目の解釈は難しい。バビロンから出ていった者を、デーメートリオスの部下アルケラオス、またはセレウコスの部下パトロクレース、いずれの軍を指すかである。そこで、この行の後部で、(セレウコスによつて) エサギルの瓦礫は取り除かれたと、読み取れるならば、セレウコスに追われたアルケラオスを指し、セレウコス側のバビロン奪回がおこなわれたとみられる。

- 34 「第九年」。アレクサンドロス王、(すなわち) 同名の息子、そして、セレ「ウコス……」
- 35 「……ア」ツカド、かれはバルシバに行った。そして大麦と、「なつめやし」一スツ [……]
- 36 「……」バルシバの内、そして……の内 [……]
- 37 「……」エサギル、かれは委ねた。十二日、十三日、十「四日……」
- 38 「……」……バビロニア人にむかった [……]

34行目の文頭を、第九年とすれば、この年は前三〇八／七年である。35―38行は、ボルシツパへ行き、そしてバビロニア人のもとにむかった行動であるが、セレウコス、あるいは他の者であろうか、判然としない。しかし、

- 39 「……」……悲涙と哀痛が地上に「……」  
 40 「……」かれは都市と田舎を略奪した。「……」  
 41 「……」バビロニア人「……」  
 42 「……」それはア「レクサンドロス」の最初の年に「……」  
 43 「……」王はバビロニア人に「……」

欠損

タブレット (BM 34660) 左側面

- 1 「……」そして、アンティゴノスの軍隊「……」に  
 2 「……」アブの月、二十五日? 「……」セレウコスの軍隊の前の戦い「……」

戦闘がなおも続いている。おそらくセレウコス側とアンティゴノス側の戦いであろう。左側面にみられる、アンティゴノスの軍隊、アブの月(七―八月)、セレウコスの軍隊の前における戦い、等の表現は、前三〇八年、八月半ば過ぎまで戦いが継続していたことを物語っている<sup>例</sup>。

なお、42行目「それはア「レクサンドロス」の最初の年に」、43行目「王はバビロニア人に」、について、これらを、セレウコスの最初の年と読み、そして、王をセレウコスと解釈し、42―43行を、アレクサンドロスの第九年では

なく、セレウコス<sup>1</sup>の登位年代とみなした、前三〇六／五年のこととする見解がある<sup>2</sup>。

## おわりに

「ディアドコイ年代記」の年代の範囲は、ピリッポスの第四年(前三二〇／一九年)から、アレクサンドロスの第九年(前三〇八／七年)にいたる一時期である。この十年余の間に、マケドニアにおいてはアレクサンドロス大王の王家の血統は絶え、アジアにおいてはアンティゴノスの勢力が増大したが、しかし、セレウコスがアンティゴノスと対立しながら、バビロニアとその東部において地歩を固めた事情もよくうかがえる。この年代記の編者が、ギリシア語による記述、たとえば、カルディアのヒエローニューモスの『ディアドコイ史』を利用したか、については、否定的に考えてよからう。

ディオドーロスは、ガザの戦いのあと、セレウコスが少数の仲間を励まして、バビロニアに入り、その住民の人心を掌握し、アンティゴノスの支配を崩したことをあげている(Diod. XIX, 90-91)。「ディアドコイ年代記」によれば、バビロニアにおける、セレウコスとアンティゴノスの争いが、いかに長期にわたったかをリアルに伝えているのである。ディオドーロスのセレウコスに対する見方は、あまり批判的ではない。「ディアドコイ年代記」にいたっては、アンティゴノスには怨嗟の声が投げ掛けられ、セレウコスには非常に好意的である。これは、セレウコスがバビロニアをセレウコス朝の始祖として支配した、という理由だけでもなからう。

## 註

- (1) テクストについては、Smith, S., *Babylonian Historical Texts*, (London, 1924; Hildesheim · New York, 1975), 124-149,

Plates, XV (No. 34660), XVI (No. 36313); Furlani, G., La cronaca babilonese sui diadochi, *Rivista di Filologia e di Istruzione Classica*, N. S. 10 (1932), traduzione 462-466; Grayson, A. K., *Assyrian and Babylonian Chronicles* (Texts from Cuneiform Sources 5), (Locust Valley, New York, 1975), No. 10, pp. 25 and 115-119, Plate XVIII.

A・K・グレイソンは『土著書中の解読 (8—82ページ)』で「バビロニアにおよび『カチトリー』を回つてくる年代記シリーズが作成された」と種定し、それをもたす。新バビロニアのナブナーシム (Nabu-nasir 747-734 BC) から「ヤルナロス王国のはつセレウロス二世 (Seleukos 246-226/5 BC) までの一連の年代記を取り上げ、古代メソポタミアにおける最長の年代記群とみなしている。それらは『編者が異なる二つのグループに分けられ、その最初の部分を「新バビロニアの年代記群」(同書 Nos. 1-77)、『ナブナシルから』ペルシマのバビロン征服ごろたる前五三九年まで)、『後の部分を「後期バビロニアの年代記群」(同書 Nos. 8-13) a)、『キタロスのバビロン征服の前五三九年から』セレウロス二世まで)とつづる。したがって、A・K・グレイソンによれば、『「クニヤエロヤ年代記」(同書 No. 10)』が『後期バビロニア年代記群』の一といふべし。

スミス の 解 説、 発 表 以 後 の 研 究 に つ い て、 彼の 文 献 抄 を 年 代 順 に 掲 げ て 掲 げ、 Otto, W., Die Bedeutung der von Sidney Smith, Babylonian historical texts veröffentlichten Diadochenchronik, *Sitzungsberichte der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, philosophisch-philologischen historischen Klasse*, (1925), 9-13; Smith, S., The Chronology of Philip Arrhidaeus, Antigonus and Alexander IV, *Revue d'Assyriologie*, 22 (1925), 179-197; Carraignac, E., Le début de l'ère des Séleucides, *Revue d'Assyriologie*, 23 (1926), 5-11; Beloch, K. J., *Griechische Geschichte*, IV, 2, (Berlin, 1927; 1967), 616-619; Momigliano, A., La cronaca babilonese sui Diadochi, *Rivista di Filologia e di Istruzione Classica*, N. S. 10 (1932), 467-484 [= Id., *Quinto Contributo alla Storia degli Studi Classici e del Mondo Antico* 2, (Roma, 1975), I. Traduzione di Giuseppe Furlani, 857-861], II. Commento storico di Arnaldo Momigliano, 862-878]; Neppi Modona, A., Studi diadochei. II. Seleuco fu compreso nel trattato di pace del 311 a. Cr.?, *Athenaeum*, N. S. 11 (1933), 3-9; Manni, E., Tre note di cronologia ellenistica, (I), (II), *Rendiconti Acca. Naz. dei Lincei, Classe di Scienze Morali, Ser. VII*, Vol. IV (1949), 53-67; Funk, B., Die Babylonische Chronik Smith als Quelle des Diadochenkampfes (321-306 v. Chr.), *In memoriam Eckhard Unger. Beiträge zu Geschichte, Kultur und Religion des Allen Orients*, hrsg. M. Lurker, (Baden-Baden, 1971), 217-240, Transkription, 238-240; Hauben, H., On the Chronology of the Years 313-311 B. C.,

- American Journal of Philology*, 94 (1973), 256-267; Oelsner, J., Keilschriftliche Beiträge zur politischen Geschichte Babylonien in den ersten Jahrzehnten der griechischen Herrschaft (331-305 v. u. Z.), *Akorientalische Forschungen*, 1 (1974), 129-151; Joannes, F., Les successeurs d'Alexandre le Grand en Babylonie: Essai de détermination chronologique d'après les documents cunéiformes, *Anatolica*, 7 (1979/80), 99-115; Schober, L., *Untersuchungen zur Geschichte Babylonien und der Oberen Satrapien von 323-303 v. Chr* (*Europäische Hochschulschriften 147*), (Frankfurt am Main · Bern, 1981), 106-139; Seibert, J., *Das Zeitalter der Diadochen* (*Erträge der Forschung 185*), (Darmstadt, 1983), 70-81; Mehl, A., *Seleukos Nikator und sein Reich. I. Teil: Seleukos' Leben und die Entwicklung seiner Machtposition* (*Studia Hellenistica 28*), (Lovanii, 1986), 129-134; Geller, M. J., Babylonian Astronomical Diaries and Corrections of Diodorus, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 53 (1990), 1-7; Van der Spek, R. J., Nippur, Sippar, and Larsa in the Hellenistic Period, *Nippur at the Centennial: Papers Read at the 35<sup>th</sup> Rencontre Assyriologique Internationale, Philadelphia, 1988*, (Occasional Publications of the Samuel Noah Kramer Fund, 14), ed., by M. deJong Ellis, (Philadelphia, 1992), 235-260, esp. Appendix I: The Struggle Between Antigonus and Seleucus for Babylonia in 312-308 B. C., 243-250.
- (2) ェルヒョニボスヌメノトクロクヨロソレヅク Berve, H., *Das Alexanderreich auf Prosopographischer Grundlage*, 2. Bd. (München, 1926), Nr. 627, S. 313-316; Nr. 494, S. 249-250; Heckel, W., *The Generals of Alexander's Empire*, (London, 1992), 134-163; 165-170.
- (3) Errington, R. M., From Babylon to Triparadeisos : 323-320, *Journal of Hellenic Studies*, 90 (1970), Appendix I: Curtius' Account of Events at Babylon, 72-75; Atkinson, J. E., *A Commentary on Q. Curtius Rufus' Historiae Alexandri Magni Books 3 and 4*, (Amsterdam, 1980), 23-73.
- (4) Diodoros, XVIII, 3, 1-5; Justinus, XIII, 4, 10-23; Curtius, X, 10, 1-4; Arrianos, *Met. Alex.* 1 a. 5-7; 1 b. 2-7.
- (5) コトニホスノ年代編按史ヲ撰シテゾク Schober, L., *op. cit.*, 46-73; Parker, R. A. and W. H. Dubberstein, *Babylonian Chronology 626 B. C. -A. D. 75*, (Brown University Studies 19), (Providence, Rhode Island, 1956), 34-35.
- (6) Heckel, W., *op. cit.*, 160-161. トムノトクロクヨロソレヅク Seibert, J., *Untersuchungen zur Geschichte Prolemaios' I.*, (München, 1969), 112; Billows, R. A., *Antigonos the One-Eyed and the Creation of the Hel-*



- lenistic State*, (University of California Press, 1990), 60.
- (7) トリパタネーシスの会談にこうして Errington, R. M., *op. cit.*, 67-72; Schöber, L., *op. cit.*, 40-45; Billows, R. A., *op. cit.*, 68-71. セレウコスとピリシスの戦歴にこうして Grainger, J. D., *Seleukos Nikator: Constructing a Hellenistic Kingdom*, (London, 1990), 32; cp. Schöber, L., *op. cit.*, 50.
- (8) バビロニアにおけるピリシスの最後の日付はこうして 第八年 アブの月二十日 (前三二六年八月十三日)° Contenanu, G., *Contrats neo-babyloniens. Textes Cunéiformes du Musée du Louvre*, vol. 13, (Paris, 1927), 249. シリシスの没時をこうして Diodoros, XIX, 11; Skeat, T. C., *The Reigns of the Ptolemies*, 2. Aufl., (München, 1969), 27-28.
- (9) ピリシス王の治に於ける支配の概況をマンネトコノスの名に於ける支配年が用いられたことが BM 35603 表面 3-4 行 Sachs, A. J. and D. J. Wiseman, *A Babylonian King List of the Hellenistic Period*, *Iraq*, 16 (1954), 202-211; W 20030, 105 裏面 4-6 行 Van Dijk, J., *Vorläufiger Bericht der Ausgrabungen in Uruk-Warka 18*, (1962), 53-60. (W の記号は、ウルカにおける発掘タブンメナを指す)
- (10) Van der Spek, R. J., *op. cit.*, 245; cp. Geller, M. J., *op. cit.*, 2, n. 8. ペルシヤに於けるマンネトコノスの最後の日付はこうして 第七年 第二月十二日 (前三二一年五月十三日)° *Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum (=CT)*, Part 49: *Late-Babylonian Economic Texts*, by D. A. Kennedy, (1968), 50.
- (11) ゲッラーによるテキストの 1-8 行の復元提案は「同じ月、エメスラム神殿の管理者は、セレウコスとともに反乱を起こした。しかし、……かれは宮殿を獲得できなかった。その月、……銀四〇タラント……。アブの月、かれはバビロンの壁の獲得をなしたなかったのべ、……。セレウコスは迷った。ユーフラテス川を塞ぎ止めなかった……。」Geller, M. J., *op. cit.*, 2.
- (12) Van der Spek, R. J., *op. cit.*, 245; cp. Grainger, J. D., *op. cit.*, 88-89.
- (13) Welles, C. B., *Royal Correspondence in the Hellenistic Period*, (New Haven, 1933; Repr. Chicago, 1974), No. 1, pp. 1-12; Diodoros, XIX, 105.
- (14) Sachs, A. J. and H. Hunger, *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia, Vol. I (Diaries from 625 B. C. to 262 B. C.)*, (Wien, 1988), No. 309, pp. 228-232. だが、ペルシヤにおけるアレクサンドロスの年代の最も早く確実な例は、CT 49, 19 にみえる第六年 シマヌの月四日 (前三二一年六月三日) である。アンティゴノスの年代の次に、アレクサ

- ンドロス年代として、その第六年目から算定されたとおもわれる。この見方については、Van der Spek, R. J., *op. cit.*, 246. アレクサンドロスがカッサンドロスの指示によつて殺害されたのは、前三二二—一〇年頃である (Diodoros, XIX, 105)。しかし、そのじゆアレクサンドロスの年代は、前三〇六—五年までは続けられる。Oelsner, J., *op. cit.*, 135-136; Skeat, T. C., *op. cit.*, 28-29.
- (15) Sachs, A. J. and H. Hunger, *op. cit.*, No. -308, pp. 232-239.
- (16) アルケラオスとオシダの Billows, R. A., *op. cit.*, 142; Van der Spek, R. J., *op. cit.*, 249. ショーバーは、アンティオコスの説に依る。Schöber, L., *op. cit.*, 124.
- (17) エサギルの瓦礫の清掃におもわれる表現は、セレウコス一世、あるいはセレウコス朝との關係にとらえられるようである。アンティオコス一世の場合、Grayson, A. K., *op. cit.*, No. 11, obv. 2, p. 120.
- (18) Grainger, J. D., *op. cit.*, 89-92. ショーンバーの論文をオスマインの記述 (Polyainos, IV, 9, 1) に同定している。Schöber, L., *op. cit.*, 135.
- (19) フントは、セレウコスの最初の年と読むことを主張し、34—43行を前三〇七—六年と前三〇六—五年の出来事とみる。Funk, B., *op. cit.*, 228. 問題点の並論については、Otto, W., *op. cit.*, 10; Smith, S., *op. cit.* (1925), 191; Grayson, A. K., *op. cit.*, 26, 42.

— 文学部教授 —